研究指導 木谷 耕平 准教授

地域活動への参加と地域への愛着形成
-学生を対象としたアンケート調査より-

薄井 悠

1. はじめに

近年，人口流出に伴う地方の人口減少が社会問題として挙げられることが多い．特に若年層の地方からの転出は年々増加傾向にある．図1は，三大都市圏と地方の転出数の推移を示したものである．東京への一極集中が続く一方で，地方圏では転出超過が続いている状態である．このまま地方からの人口流出が続くと，生活関連サービスの縮小や税収が減少することで行政サービス水準の低下等の問題が発生するとされており，自治体や地域がその機能を果たさなくなってしまう（国土交通省[1]）．また，現在多くの都市が消滅可能性都市に指定されており，先行きが懸念される[2]．そのため，人口流出による問題を抱える多くの自治体や地域では人を呼び戻す，または呼び込むための取り組みを行っているが，成功しているのはほんの一部である．

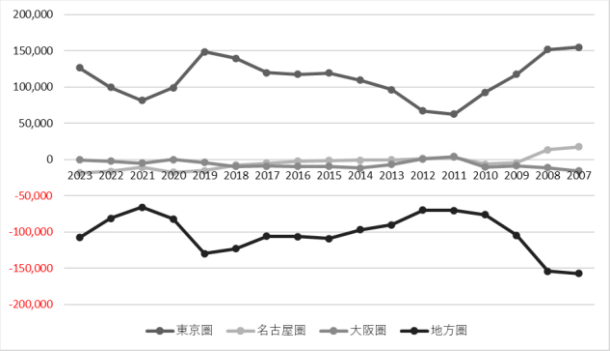

図1 純転入数の推移
出典 総務省統計局 住民基本台帳より筆者作成

地方の人口減少を改善するためには，若者に地域に残ってもらうためのさらなる取り組みが必要である．

2. 先行研究および研究目的

若者が地域に残る上で，地域への愛着が重要な役割を果たすことが，先行研究で示唆されている．

北山[4]では，「愛着」「U ターン意識」「学力」の 3 項目に関して，それぞれの相関関係を明らかにし，特徴を提示した．この研究はアンケート調査に基づいており，ある地域の 4 校に在籍する高校生がその調査対象である．複数の質問項目から「愛着度」と「地域志向度（地域に対し愛着を持ち，ボランティア活動などの行動に移そうとすること）」を数値化した．結果から，「愛着度」と「地域志向度」には比例の関係があることが示された．その中でも，転出予定者では「愛着度が高くなると U ターン意識が高くなる」関係があると指摘している．この研究は，地域への愛着が強いと地域に対して行動を起こす意識や、やがて地域へ戻るという意識が高いことを示している．

引地・青木・大渕[5]では，地域に対する愛着を「人と地域を結ぶ情緒的な絆」と定義し，アンケート調査を実施した．対象地域は無作為抽出による全国 16 市町村である．回答者の平均年齢は 53.7 歳であり，主婦層からの回答が大半を占めていた．この研究では「住民からの社会的環境（イベント，交流，治安など）への評価は，物理的環境（交通網，周囲の施設など）に比べて，地域に対する愛着をより高めることが示唆された」と結論付けている．

以上のことから，地域への愛着度を高めることができれば，地域に残る人や戻ってくる人が増えると考えられる．また，愛着を高める要因には複数考えられるが，その中でも引地ら[5]はイベントや交流などの社会的環境の重要性を指摘している．一方で，引地ら[5]は，実際に地域活動に参加することで地域への愛着が増すのかを，直接的に検証したものではない．

そこで本研究では，実際に地域活動に参加することで，地域への愛着が増すのかを明らかにする．会津若松市の学生を対象に，地域イベントへの参加の前後で地域への愛着がどう変化するのかを分析することで，地域活動による愛着の向上という因果関係を検証する．先に述べた通り，地域への愛着の向上は，地域へ残るまたは戻ることにつながる可能性が高い．地域活動への参加による愛着の変化を明らかにすることで，地域への愛着向上ひいては若者の地元定着の方策としての地域活動の重要性を検討する．

3. 仮説

3.1 地域活動とは

新谷[5]は，地域活動を「地域のコミュニティの中で住民が主体的に行う活動」と定義している．本研究で取り扱う「地域活動への参加」は，会津大学短期大学部の科目である「地域プロジェクト演習」に参加することとする．シラバスによると，「地域プロジェクト演習」は，「実社会のフィールドの中で直接学ぶ科目として，学生参画型実学・実践教育を推進するものとあ

り，社会貢献の推進も同時に目的としている」．今年度は2024年11月23・24日にあいづ総合体育館で行われたスポーツイベント「第3回會津Jr．BLAZERSカップ＆バレーボール教室」の企画からSNSの運用，運営までを履修学生が行った．

学生の大半が会津若松市に居住しており，またこのプロジェクトでは学生が地域イベントの企画やSNSの運用，イベントの運営まで主体的に関わるため，「地域活動」の定義に当てはまると考える．

3.2仮説

本研究では，以下の仮説を検証する．

仮説：「地域プロジェクト演習」の履修によって，地域への愛着度は高くなる．

「地域プロジェクト演習」を履修することで，学生の地域への愛着度は大きく向上すると考える．実際に地域の人と交流したり，地域について考えたりすることで，ただ生活しているだけでは気づかないような魅力や新たな一面を知ることができる．これらの新たな発見により，その地域をより身近なものと捉えることができれば愛着も向上するのではないか．

4. 調査内容

4.1調査方法

「地域プロジェクト演習」を履修している学生と履修していない学生を対象にアンケート調査を2回実施した．1回目はスポーツイベントの開催前，2回目は開催後とし，実際に地域イベントに参加することで会津若松市に対する印象や愛着に変化が見られるのか，参加前後の比較を行う．

調査対象の詳細および調査期間は以下のとおりである．

調査対象：地域プロジェクト演習履修者（19名）
履修していない学生（101名）
合計120名
調査方法：Googleフォームによるアンケート調査
調査期間：①2024年11月19日~11月22日
②2024年12月6日~12月15日

4. 2調査項目

アンケートでは，引地ら[3]を参考に以下のような項目を設けた．

はじめに基本情報として，「地域プロジェクト演習」を履修しているかどうかや，出身地，現在の居住地，過去に地域活動に参加経験が有るかを尋ねた．

次に，現在の会津若松市に対する評価を4件法で評価してもらった．質問項目は「会津若松市は過ごしやすい場所か」「会津若松市で行われる行事やイベントを楽しみにしている」「会津若松市の雰囲気や土地柄を気に入っている」など合計7つである．この7つの各質問への回答および7項目の平均値を，その人の愛着度の指標として分析とする．

2回目のアンケート調査では，1回目の調査項目に加えて，プロジェクト演習の履修者に対してのみ，「イベントに参加したことで愛着や印象に変化はあったか」とその理由を尋ねた．

5. 分析方法

今回の分析で用いるのは「差分の差分法」である．

「差分の差分法」とは，2時点以上の時点で観測されたデータを利用し，処置の前後で「処置群の平均的な変化（差分）」と「対照群の平均的な変化（差分）」の差分を処置の効果として推定する手法[4]である。本研究では，スポーツイベントの開催前と開催後が2時点となり，措置群がプロジェクト演習の履修者，対照群が非履修者となる．

6. 結果

アンケートへの回答数は，1回目では履修者が16件，履修していない学生が42件であった．2回目では，履修者が9件，履修していない学生が41件であった．両方のアンケートに回答したのは34件である．この内，「地域プロジェクト演習」を履修している学生が7件，履修していない学生は27件である．

履修している学生と履修していない学生に，会津若松市に対する愛着を問う7つの質問をし，その回答の平均を取って比較したのが表2である．4列目の差は履修者と履修していない学生それぞれについて，イベント前の値からイベント後の値を引いたものである．さらに，その差の差を取ったものが「0.5」である．

表1 履修者と未履修者の愛着度（平均値）の比較

	イベント前	イベント後	差
履修者	3.22	2.71	0.51
未履修者	2.84	2.83	0.01
差	0.38	-0.12	0.5

数値を比較すると，履修していない学生は愛着度が0.01減ってはいるが，ほぼ変わらない結果となった．一方で履修者はイベントの後に大きく平均値が下がっている．仮説の通りであれば，差の数値は負の値を示すはずだが，正の値を示している．

表2から表4は会津若松市の評価項目全体ではなく個別の項目について差を求めたものである．特に，イベントの参加によって直接影響を受けると予想される「会津若松市は過ごしやすい場所か」「会津若松市の雰囲気や土地柄を気に入っている」「愛着はある

か」の3つの質問について比較する.

表2 「過ごしやすい場所か」の比較

	イベント前	イベント後	差
履修者	3	3	0
未履修者	2.9	2.8	0.1
差	0.1	0.2	-0.1

表3 「雰囲気や土地柄を気に入っているか」の比較

	イベント前	イベント後	差
履修者	3.4	2.6	0.8
未履修者	2.9	3.1	-0.2
差	0.5	-0.5	1

表4 「愛着はあるか」の比較

	イベント前	イベント後	差
履修者	3.1	2.7	0.4
未履修者	2.7	2.7	0
差	0.4	0	0.4

表2の「会津若松市は過ごしやすい場所か」に関しては, どちらのグループもほぼ変わらない評価である. 表3の「会津若松市の雰囲気や土地柄を気に入っている」という質問に関しては, 履修者と履修していない学生での比較の差は「1」と大きく, 履修者の評価がイベント後に下がっている. 表4の「愛着はあるか」の質問でも, イベント後に履修者の評価が下がっている.

以上のように, 愛着度の平均値でも個別の項目でも, イベントへの参加が愛着を高めるという結果は得られなかった.

図2 履修による愛着の変化についての自己評価

図2は, プロジェクト演習の履修によって、会津若松市への愛着が変化したかを自己評価してもらった結果である. 表4は愛着度をイベントの前後で比較しているが, 図2はイベント後に愛着の変化を尋ねたものである. ここでも、半分以上が愛着は以前と変わらないと回答しており、イベントへの参加が愛着度を増加させるという結果は得られなかった.

7. 考察

以上の結果より,「地域プロジェクト演習」の履修によって, 地域への愛着度は高くなるという仮説は支持されなかった. その理由として, 以下の点が考えられる.

ひとつは, イベントへの事前の期待である. 2回目のアンケートでは, 図2の「イベント参加後, 会津若松市に対する愛着に変化はあったか」という質問に関連して, その理由も尋ねている. 理由として、「元から期待はしておらず, イベント参加後もその評価に変化はないから」や「会津若松市との連携が取れておらず, がっかりしたため」といった回答がみられた. イベントに参加し, 地域の内情や連携の様子を知ったことで, 参加者の中にあった地域への期待との齟齬が生じたことが, 愛着度の低下につながったのではないかと考えられる.

次に履修理由が関係していると考える.「地域プロジェクト演習」履修者に履修した理由を聞いたところ,「担当の先生で選んだ」「単位が取得しやすいと聞いたから」「友人に誘われたから」などの理由が大半を占めており,「地域貢献したい」「会津のイベントの興味があったから」というような地域活動に前向きな理由で履修している学生が少なかった.

前向きな理由で参加した学生は2回目のアンケートで愛着は向上したと回答しており, イベントの効果がみられる。後ろ向きな理由で参加した人は, 元々地域に関心がなく, 地域と触れ合うことが愛着の向上にはつながらなかったと考えられる. もし前向きな理由で履修する学生が多かったら結果は変わっていたのかもしれない. 参加者本人のイベントに対するモチベーションが愛着度の変化に影響することが推測される.

また, 表2~4の3つの質問の比較では,「会津若松市は過ごしやすい場所か」に変化はなく,「会津若松市の雰囲気や土地柄を気に入っている」は評価が下がっている. これは, アンケートを取った時期の影響もあると考えられる. アンケートの実施期間は, 11月と12月であり, これからクリスマスや大晦日などの大きなイベントが控えているなかで, 他地域に比べイベントへ向けた賑やかさなどがなかったと感じた人がいたからではないかと考える. このような, 地域のイベント時の賑わいも土地柄や雰囲気を評価する基準に

なっているのではないだろうか.

8. 結論

今回の研究では,「地域プロジェクト演習」の履修によって地域への愛着度は高くなるという仮説は, 支持されない結果となった.

今回の研究の課題は, 期間とサンプルサイズにある. 1回目のアンケートを実施したのがイベント開催前の11月であった. その時点ですでにある程度の愛着は固まっており, 2回目のアンケートで変化なしと回答する人が多かったのかもしれない. プロジェクトが始まる前の段階から検証を始めれば, 今回とは異なる結果を得られた可能性がある.

また, 得られた有効回答が少なかったことも本研究の課題である. 本来であれば検証予定だった,「出身地」や「過去の地域活動」によるイベント参加の効果の違いは, サンプルサイズが少なく検証できなかった. 今後同様の研究を行う際はいかに回答数を増やすかが大切であると同時に, 調査対象を拡大することも少ないサンプルサイズを避けるためのひとつの手段になるだろう.

今後, 研究の開始時期などを改めて検証する必要がある.

参考文献

[1] 国土交通省, 国土交通白書 2024 （参照 202405-20）
https://www.mlit.go.jp/statistics/file000004/html/nh000000.html

[2] 安部順一, 地方消滅 2, 中公新書, 2024

[3] 総務省統計局, 住民基本台帳人口移動報告, 男女別転入超過数 （2024-11-30）
http://www.stat.go.jp/data/idou/index.htm

[4] 北山大地（2021）,「地方都市における高校生の地域に対する愛着・U ターン意識・学力の 3 関係」（参照 2024-02-16）
https://repository. kulib. kyotou. ac. jp/dspace/bitstream/2433/261792/1/jerra_6_107. pdf

[5] 引地・青木・大渕（2009）,「地域に対する愛着の形成機構-物理的環境と社会的環境の影響-」（参照 2024-05-09）
https://www. jstage. jst. go. jp/article/jscejd/65/2/65_2_101/_pdf

[6] 新谷和代『地域活動のススメ』幻冬舎, 2019

[7] 吉村芳弘（2022）「差分の差分法（difference in differences）―介入前後の データから効果を検証―」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjrmc/59/11/59_59.1093/_pdf